

要支援認定を受けた高齢男性の社会活動とその目的

ヒラノ ミチヨ 平野美千代* サエキ カズコ 佐伯 和子* ウエダ 上田 泉^{2*} イズミ ホンダ 光* ミズノ ヨシコ 水野 芳子*

目的 要支援認定を受けた高齢者のニーズに適合した、効果的な生活支援・介護予防サービスを展開するため、本研究は、要支援認定を受けた高齢男性（以下、要支援高齢男性）の社会活動とその目的を明らかにすることを目的とする。

方法 研究デザインは質的帰納的研究を用い、要支援高齢男性17人を対象に半構造化面接による個別面接を実施した。分析は質的記述的分析により行った。

結果 要支援高齢男性の社会活動として4カテゴリ、社会活動の目的として5カテゴリを抽出した。要支援高齢男性の社会活動は、家族・親族や旧友、近所の人との【生活に安らぎを与える、気心の知れた人たちとのかかわり】や、介護予防サービスや老人クラブ、趣味の集まりといった【かかわる相手や活動内容が明確なサービスやプログラム等の参加・利用】であった。また、【全盛期の就労時代が反映される職場関係者とのかかわり】では、元同僚の集まりに積極的に参加する者がいる一方、一切行き来しない者もいた。さらに、読書やテレビ鑑賞、一家の主としての家庭内の役割など【身近な暮らしの場で行う自分の気持ちや生活を豊かにする活動】も行われていた。

要支援高齢男性の社会活動の目的は、【人とのコミュニケーションを通じた社会とのつながり】であった。また、【同年代・年配者と過ごすことで得られる安心感】を求め、老人クラブや趣味の集まりに参加していた。要支援高齢男性は、【主体的な運動の継続による身体機能の維持・向上】や【意図的に思考を巡らせることによる学びの継続】を行うため、定期的に運動や認知機能を活性化させる機会をつくっていた。また、【自らが快くなれる有意義なひととき】を得るため、興味のある運動や趣味の場へ参加し、生活に楽しみや潤いを与えていた。

結論 要支援高齢男性の社会活動の特徴として、1つめは、職場関係者とのつきあいが含まれること、2つめは、気心の知れた人たちとのかかわりがなされ、そのかかわりの程度にはレベルがあること、3つめは、退職した現在も、社会や時代を意識した活動が行われていることが挙げられる。また、要支援高齢男性は社会活動に対する自身の目的を明確化、具体化しており、社会活動として心身機能や生活において現実的に価値あるものに取り組んでいることが示唆された。

Key words : 社会活動, 要支援, 高齢男性, 質的研究

日本公衆衛生雑誌 2017; 64(1): 14-24. doi:10.11236/jph.64.1_14

I 緒 言

団塊の世代が後期高齢者となる2025年に向け、医療・介護の連携強化として、地域包括ケアシステムの構築が喫緊の課題となっている。地域包括ケアシステムは、自助・互助・共助・公助の観点から¹⁾、フォーマル、インフォーマルな社会資源をシステム

として機能させることが重要である。そのなかで、生活支援・介護予防サービスは、地縁組織やボランティア、NPO等の資源を活用し、地域住民の参加によるサービスが重要となっている。生活支援・介護予防サービスは、日常生活動作や手段的日常生活動作が自立した高齢者（以下、自立した高齢者）や要支援認定を受けた高齢者（以下、要支援高齢者）の社会活動の観点を取り入れることが、実用的かつ効果的なサービス提供に発展すると考えられる。

高齢者の社会活動の重要性は、先行研究より明らかにされている。社会活動は高齢者の生命予後を規定する要因であり²⁾、家族以外との会話、活動参

* 北海道大学大学院保健科学研究院

^{2*} 札幌医科大学保健医療学部

責任著者連絡先：〒060-0812 札幌市北区北12条西5丁目

北海道大学大学院保健科学研究院 平野美千代

加、近所づきあい、趣味等の社会関連性が乏しいと死亡率が高くなる³⁾。また、日常生活自立度JランクやAランクの高齢者は、知人・友人の家を訪ねる、庭や家のまわりの手入れをする、家事や買い物をする等の活動が自立度に関連する⁴⁾。

また、社会活動の定義は多様になされている。海外では、就労、ボランティア、宗教活動への参加、家族・友人・隣人等に会う⁵⁾、友達との映画鑑賞や外食、グループミーティングへの参加⁶⁾等が社会活動として扱われている。特に、高齢者の社会活動として、仕事やボランティアの世話人、他者への援助等、地域社会への貢献⁷⁾が示されている。日本では、社会と接触する活動⁸⁾、家庭外での対人活動⁹⁾、地域で実施される集団的活動¹⁰⁾、自己完結する活動を通じた社会との関わり¹¹⁾等が社会活動として扱われている。

高齢者の社会活動には、身体面、社会・環境面が関連することが報告されている。まず、社会活動と身体面の関連では、虚弱高齢者や要支援高齢者には自宅外の役割や趣味を有する者が少なく¹²⁾、楽しみごととして家族や友人との交流、介護保険サービスの利用¹³⁾がある。介護老人保健施設入所者および通所サービス利用者の社会活動では、テレビの視聴や職員・家族との会話といった容易な活動の実施頻度が高くなっている¹⁴⁾。また、要支援認定を受けた高齢女性（以下、要支援高齢女性）の社会活動は、自宅外では目的が明確で必要性の高い活動、自宅内では自己の機能を生かした主体的な活動である¹⁵⁾。

一方、老人クラブ参加者を対象にした調査では、74歳以下の男性は体力を必要とする活動に社会的役割を求め、75歳以上の男性は食・安全・趣味の領域で活動希望が高い¹⁶⁾ことが報告されている。なお、高齢者の社会的・余暇的活動には性差があり、男性は就労や趣味活動が多く、団体への参加や友人・知人との交流が少ない¹⁷⁾。このように、高齢者の社会活動は身体機能や年齢により活動の目的や内容が異なり、虚弱高齢者や要支援高齢者の場合、活動の範囲や内容が縮小すると考えられる。加えて、社会活動には性差が存在するといえる。

次に、社会活動と社会・環境面の関連では、都市部高齢者はサポートの授受が可能な近隣がいることを認知している者は少ない¹⁸⁾。また、困りごとの表出に関しては、都市部高齢者は能動的に社会資源を利用する姿勢がみられ、農村地域高齢者は周囲の状況に合わせて受動的に社会資源を利用する姿勢がみられる¹⁹⁾。このように、高齢者の行動のうち、特に社会資源の利用については、生活する地域の状況や地縁が影響すると考えられる。

これまでの研究において、社会活動の有効性や、自立した高齢者および要支援高齢女性の社会活動は明らかにされているが、要支援認定を受けた高齢男性（以下、要支援高齢男性）の社会活動は明らかにされていない。要支援高齢者の社会活動には性差が予測され、要支援高齢者のニーズに適合した、効果的な生活支援・介護予防サービスを展開するためには、要支援高齢男性の社会活動の詳細を明らかにする必要がある。そこで本研究は、要支援高齢男性の社会活動とその目的を明らかにすることを目的とする。なお、高齢者の社会活動の概念分析¹¹⁾をもとに、本研究では社会活動を「家族以外の身近な人との相互交流や集団・組織への参加、自己完結する活動を通じた社会とのかかわり」と定義する。

II 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は要支援高齢男性の社会活動の経験や経験に対する考えを対象者の文脈から明らかにするため、研究デザインとして質的帰納的研究を用いた。

2. 研究対象

対象は要支援認定を受けている65歳以上の男性とした。対象の選定はA市地域包括支援センターの所管部署に研究協力ならびに対象者の推薦を依頼し、対象者16人の紹介を得た。また、対象の背景の相違による分析結果の影響を確認するため、比較事例として人口規模の異なるB町地域包括支援センターの所管部署に研究協力ならびに対象者の推薦を依頼し、対象者3人の紹介を得た。対象者への依頼は、担当ケアマネジャーより研究主旨を説明してもらい、内諾が得られた段階で研究者より研究について説明を行った。

対象地域としたA市は人口190万人、高齢化率20.5%の都市であり、B町は人口6,000人、高齢化率33.1%の自然を有した農業の町である。

3. データ収集

2014年11月～2015年3月、対象者宅または研究者の所属施設において、対象者1人につき60～90分の半構造化面接を1回実施した。データ収集の質を保証するため、すべての面接を研究代表者が実施した。面接では、①普段の生活の様子、②家族以外の身近な人との交流、③集団・組織への参加状況、④自己完結する活動を通じた社会とのかかわり等の質問項目で構成したインタビューガイドを用い、対象者が思いや考えを自由に語れるよう配慮し面接を展開した。なお、面接内容は対象者の了解を得てICレコーダで録音した。

4. 分析方法

分析は、対象者から語られた現実を抽象化して記述する質的記述的分析²⁰⁾を用いた。まず、録音した面接内容から逐語録を作成しデータとし、データから“要支援高齢男性の社会活動”と“社会活動の目的”が読み取れる文脈に着目しコードとした。次に、A市とB町の属性による違いを考慮するため、1事例ごとにコードを作成した後、A市とB町の事例に分けて分析し最終コード案を抽出した。A市とB町の事例より抽出した最終コード案の相違を検討し、相違がないことを確認した後、A市とB町のコードを併せて最終コードを抽出し、類似した最終コードを集約しサブカテゴリを抽出した。継続比較分析をしながら、サブカテゴリの関係性および内容を検討しカテゴリに名称をつけ抽象化した。カテゴリの抽出では、データ、コードに戻りながら、慎重に抽象度を高めた。

データ分析の真実性を保証²¹⁾するため、分析過程は質的研究の経験を有する共同研究者間で検討を重ねた。また、協力が得られた2人の対象者に、抽出したサブカテゴリとカテゴリについて意見を確認し、分析内容は要支援高齢男性の社会活動や目的を表した妥当なものであるとの確認を得た。

5. 倫理的配慮

調査実施にあたり、研究目的と方法、対象者の権利を保護するための守秘義務、研究協力を辞退する権利、データの保管と研究終了後の処分等について、対象者に口頭および文書で説明し同意書に署名を得た。なお、本研究は、2014年7月29日に北海道大学大学院保健科学研究院倫理審査委員会による承認を受け実施した（承認番号14-28）。

Ⅲ 研究結果

1. 対象者の概要（表1）

研究依頼の結果、A市の対象者2人が体調不良や家庭の事情により研究協力を辞退した。

対象者の概要は、年齢は80代が最も多く13人、居住地はA市14人、B町3人、家族構成は独居7人、同居10人であった。現在、1人が経営に関する仕事をしており、それ以外の者は無職であった。調査時、対象者の多くが疾患による症状を有し、日常生活動作は概ね自立していたが、手段的日常生活動作は掃除や調理等で援助を要する者がいた。利用している主な介護予防サービスは、通所介護と訪問介護であった。

2. 要支援高齢男性の社会活動とその目的（表2、表3）

要支援高齢男性の社会活動として33最終コード、

10サブカテゴリ、4カテゴリを抽出した。また、社会活動の目的として30最終コード、13サブカテゴリ、5カテゴリを抽出した。以下、カテゴリの内容について、カテゴリを【 】, サブカテゴリを《 》, 対象者の語りを「斜字」で記述する。

1) 要支援高齢男性の社会活動

(1) 【生活に安らぎを与える、気心の知れた人たちとのかかわり】

要支援高齢男性は学生時代の旧友と会食や年賀状を通じ、《気心知れた旧友との途切れぬかかわり》をしていた。また、近所の人と世間話をし、時には除雪やごみ捨ての助けを得る等、《気心が知れた近所の人との生活に身近なかかわり》をしていた。家族、親族等の親しい関係性のなかで互いに交流する時間は、要支援高齢男性に安らぎを与えていた。子どもや孫の喜ぶ顔を期待し、お小遣いやプレゼントをあげることもあり、《自分の生活に安らぎが得られる家族・友人とのつきあい》を続けていた。

「僕はこの友達にね、もう腹割って。向こうも喋ってくれるしね。この人がいるから、80代にもなって、こうやって同期との交流が続いてるんですよ。」

(8)」

「向いの奥さんが良い人でね。(中略)それで俺が外に行ったときにそこに立ってて、挨拶して、パークゴルフ行くんですよ、とかって話しになってさ」

(2) 【かかわる相手や活動内容が明確なサービスやプログラム等の参加・利用】

要支援高齢男性は介護予防サービスや老人クラブ、趣味の集まり等の活動に参加していた。受診時や介護予防サービス利用時に、要支援高齢男性は生活や療養について話をし、《安心をかかわりの基盤とした医療・介護職員とのつきあい》をしていた。老人クラブ、趣味の集まりでは《グループや組織への深入りしない程度の参加》をし、体調に合わせ無理のない程度に活動をしていた。町内会活動では会員として地域活動に貢献する者や一会員として場を楽しむ者等、《自分の目的に応じた町内会活動への参加》が行われていた。

「この前エコー検査やって、(医師に)どうですか、まだもちそうかいっていったら、いやまだまだっていうんだね。(中略)かえって、(医師に)励まされて帰ってくるんだね。(14)」

「(通所介護)利用者同士はね、あんまり(会話は)ないな。だけでもひとりやふたり。やっぱり、普通の会話(中略)、今日はどうだった、調子どうだ、くらいのもんさ。(12)」

表1 対象者の概要

	年齢	居住地	家族構成	職業歴	要介護度	ADL	IADL	定期的なサービスの利用
1	60代	A市	独居	会社員	要支援2	自立	家事(調理, 掃除)の援助を受けている	訪問介護(3回/週)
2	70代	A市	妻, 子ども	自営業	要支援1	自立	家事は妻が行っている	なし
3	70代	A市	独居	会社員	要支援1	自立	家事(調理, 掃除)の援助を受けている	訪問介護(1回/週)
4	80代	A市	妻	公務員	要支援1	自立	家事は妻が行っている	通所介護(機能訓練型)(1回/週)
5	80代	A市	独居	会社員	要支援1	自立	自立	通所介護(1回/週)
6	80代	A市	独居	会社員	要支援1	自立	家事(調理, 掃除)の援助を受けている	訪問介護(3回/週)
7	80代	A市	独居	公務員	要支援2	自立	家事(調理, 掃除)の援助を受けている	訪問介護(2回/週)
8	80代	A市	妻	公務員	要支援2	自立	家事(掃除)の援助を受けている	訪問介護(1回/週)
9	80代	A市	独居	自営業	要支援2	自立	家事(調理)の援助を受けている	通所介護(機能訓練型)(1回/週)
10	80代	A市	妻, 子ども	会社員	要支援2	自立	家事(調理, 掃除)の援助を受けている	訪問介護(1回/週)
11	80代	A市	妻	公務員	要支援2	自立	家事は妻が行っている	通所介護(2回/週)
12	80代	A市	子ども	公務員	要支援2	入浴一部介助 杖歩行	家事は子どもが行っている	通所介護(2回/週)
13	80代	A市	妻	自営業	要支援2	自立	家事は妻が行っている	通所介護(機能訓練型)(1回/週)
14	90代	A市	妻	公務員	要支援1	自立	家事は妻が行っている	通所介護(1回/週)
15	80代	B町	独居	会社員	要支援1	自立	家事(調理, 掃除)の援助を受けている	なし
16	80代	B町	妻	会社員	要支援1	自立	家事は妻が行っている	通所介護(2回/週)
17	80代	B町	妻	会社員 自営業	要支援2	自立	家事は妻が行っている	通所介護(2回/週)

(3) 【全盛期の就労時代が反映される職場関係者とのかかわり】

要支援高齢男性の職場関係者との交流は様々であった。職場OB会や元同僚の集まりに積極的に参加する者がいる一方、職場関係者と一切行き来しない者もあり、《就労時代のつきあい方が影響する職場関係者とのかかわり》がなされていた。

「個人的にね、昔の仲間(同僚)と月に1回集まって飲んだりね。昔の仲間だから、だいたい2時間ぐらいなんだけど、あっという間に過ぎますね。皆で話する、そういう楽しみが好きなんだから。(10)」

「(元同僚との付き合いは)ないね。大体こうなってから、外出て歩かないしょ。引きこもりも同然だ。(16)」

(4) 【身近な暮らしの場で行う自分の気持ちや生活を豊かにする活動】

要支援高齢男性は社会の動きを感じとるため《新聞やニュース、風景を通じた社会動向の積極的な把握》をし、1人で過ごす時間には読書、絵画、テレビ鑑賞等、《自分にとって有意義な自宅内での楽しみごと》をしていた。また、美味しいものを食べるためのスーパーへの買い出しや、家計管理・住宅管理といった一家の主としての役割等、《自分や家族のために行う家事や家庭内の作業》をしていた。

「もうとにかく、取り残されたら嫌だし、生きてる限りは世の中の動きをもう少し肌で感じておきたいなって思いで。焦りがあるせいかね、週に1回はだいたい街に行ってる。(7)」

「うちの管理は自分でやらんきゃなんないから。屋根が雪落ちなくなったら、ペンキ塗る段取りせん

表2 要支援高齢男性の社会活動

最 終 コ ー ド	サブカテゴリ	カテゴリ
気心が知れた友人と会い楽しい時間を過ごす	気心が知れた旧友との途切れぬかかわり	
友人と年賀状をとおして近況報告をしあう		
近所の人に声をかけ世間話をする	気心が知れた近所の人との身近なかかわり	生活に安らぎを与える, 気心の知れた人たちとのかかわり
近所の人気軽に声をかけてくれる		
近所の人生活に密着した作業を手伝ってくれる		
町内では限られた人とのみ親しくつきあう		
妻をそばに感じながら日常を過ごす	自分の生活に安らぎが得られる家族・友人とのつきあい	
子どもや孫と一緒に時間を過ごしリラックスする		
家族や親族が生活に直結する作業を手助けしてくれる		
家族や親族と電話や年賀状等で近況や思いを伝えあう		
喜ぶことを期待し家族や友人と物やプレゼントのやりとりをする	安心をかかわりの基盤とした医療・介護職員とのつきあい	
様子を見に家族や友人が自宅を訪ねてくれる		
介護職員と互いに気軽に話をする		
医師やケアマネジャーから生活や療養のアドバイスをもらう		
ヘルパーの定期訪問によるつきあいで安心を得る	かかわる相手や活動内容が明確なサービスやプログラム等の参加・利用	
老人クラブや趣味の集まりでは他の参加者の様子を眺める		
趣味の集まりやデイサービスで出会う人とは当たり障りのない話をする		
体調に合わせて参加する活動を取捨選択する		
時間を潰すため趣味の集まりに参加する	グループや組織への深入りしない程度の参加	
町内の人とは互いに深く干渉しない程度にかかわる		
町内会のメンバーとして地域の活動に貢献する		
町内の人に会えるため町内会行事にすすんで参加する		
職場関係者と年賀状や手紙を通じたつきあいをする	就労時代のつきあい方が影響する職場関係者とのかかわり	全盛期の就労時代が反映される職場関係者とのかかわり
気心が知れた仕事仲間との会合に参加し楽しむ		
仕事上のつきあいだった職場関係者とのかかわりは、今はない		
新聞やニュースを欠かさず読み、意図的に社会情勢を把握する	新聞やニュース、風景を通じた社会動向の積極的な把握	
町の様子を目と肌で感じ取り社会とのつながりを実感する		
自分や他者のために自宅で料理や趣味等、創作活動をする	自分にとって有意義な自宅内での楽しみごと	身近な暮らしの場で行う自分の気持ちや生活を豊かにする活動
趣味や関心のある作業とおして自宅で有意義な時間を過ごす		
地図や日記を見てこれまでの日々の生活を振り返る		
好みの食材を選ぶため自分で買い物に行く		
家庭内の管理的な作業を自分で行う	自分や家族のために行う家事や家庭内の作業	
家族のために生活のなかでできる手助けを率先して行う		

きゃなんないしょ。(14)」

2) 要支援高齢男性の社会活動の目的

(1) 【人とのコミュニケーションを通じた社会とのつながり】

要支援高齢男性は《他者との交流が生活の刺激と

なる》ため、意図的にコミュニケーションをとることがあった。生きている間は社会と接触することを望み、《人と交流し社会とのかかわりを得たい》と考え活動をしていた。

「(老人クラブでは) 見てる方が多いね。色々話し

表3 要支援高齢男性の社会活動の目的

最終コード	サブカテゴリ	カテゴリ
他者とのおしゃべりを通じて気分転換をする	他者との交流が生活の刺激となる	人とのコミュニケーションを通じた社会とのつながり
集まりの場に参加し人とのつきあいを楽しむ		
趣味のグループや老人クラブ等に参加し、意図的にコミュニケーションを図る		
他者と交流し社会とのつながりを得る	人と交流し社会とのかわりを得たい	
知りたいことがあれば親切な見ず知らずの人にすすんで声をかける		
同年代とのつきあいはお互いに共感できエネルギーをもらえる	同年代とのつきあいは互いに共感しあえる	
女性が多い趣味のグループでも性別に関係なく同年代として付き合う		
宗教活動では性別を超え違和感なく付き合う		
元気な年配者の活動の様子を見てエネルギーをもらう	年配者の姿を見てこれからの自分への活力にする	同年代・年配者と過ごすことで得られる安心感
年配の通所介護利用者を見て、自分はまだ元気なほうだと実感する		
通所介護ではプログラムを通じ皆で楽しく遊ぶ	通所介護では利用者同士で楽しい時間を過ごす	
通所介護利用者が楽しめるようなおしゃべりを提供する		
自分の体のために通所介護で運動をする	身体機能の維持・向上を意識し運動をする	主体的な運動の継続による身体機能の維持・向上
筋力を維持・向上するため、散歩や器械を使って運動する		
運動を通して自分の身体機能を確認する		
歩かなくてはと思い、運動を兼ねて買い物に行く		
体が動かなくならないよう意図的に外出をする		
体の調子に合わせて運動する場を自ら考え体を動かす		
認知症にならないよう、頭を使う作業を生活のなかに意図的に取り入れる	脳の活性化を意識し、作業や他者とのかわりを意図的に行う	
すすんで他者とかわり話しをし、脳を活性化させる		
テレビを見ながら疑問に思ったことはすぐ調べ、勉強の機会にする	疑問やわからないことはすぐに調べ、理解する	意図的に思考を巡らせることによる学びの継続
年賀状を書く際にはわからない字を辞書で引き、字を覚える		
趣味に関する知識を得るため、資料や本をもとに勉強する	興味・関心をもとに教室や資料等から積極的に学ぶ	
学ぶことが好きなので教室や高齢者大学では積極的に学ぶ		
歌や運動等、自分のしたいことをするために趣味のグループや教室に参加する	趣味の集まりや教室に参加し自分のしたいことを楽しむ	
趣味のグループや地域の集まりでパークゴルフやテニス等の運動を楽しむ		
グループ活動に参加し、仲間と麻雀を楽しむ		
楽しみや癒しを求めてすすんで外出する	生活に楽しみや癒しを加え有意義に過ごす	自らが快くなれる有意義なひととき
余生を自分なりに楽しく有意義に過ごしたい		
他者のお世話をし支えになることで他者の役に立ちたい	他者のために活動し他者の役に立ちたい	

聞いたり話ししたりね、そんなとこだね。なんか、色々な良い話でも聞けるかな、あるかなって思って、話しかけるくらいでね。(4)」

「私自身はなんとか生きてる間は、社会とのつながりちゅうか、そういう仲間をつくって、生活を生きるっていうか、生きてる喜びちゅうかね。単に生活してるんでなくて、生きてるっていうことを実感

してみたいと思っているんだけど。(9)」

(2) 【同年代・年配者と過ごすことで得られる安心感】

要支援高齢男性は《同年代とのつきあいは互いに共感しあえる》ため、また《年配者の姿を見てこれからの自分への活力にする》ため、老人クラブや趣味の集まりで同年代や年配者と交流していた。介護

予防サービスを利用している者は、《通所介護では利用者同士で楽しい時間を過ごす》ことを目的に、ゲームやりハビリ、おしゃべりをしていた。

「物のとらえ方、考え方がね、高齢の人と話すると同じような考え方の人もけっこういるでしょ。そうするとね、そうなんだよな～っていうことでね。(3)」

「デイサービスは、短い人は半年とか、長い人で3年ぐらいとかね、色々だけど。やっぱりな、部落(の人たちとのつきあい)とは違うな。向こう(通所介護)は、皆で一緒に、楽しく過ごすちゅうだけで。(17)」

(3) 【主体的な運動の継続による身体機能の維持・向上】

要支援高齢男性は体のことを考え、《身体機能の維持・向上を意識し運動をする》ため、趣味や通所介護等に参加していた。また、《自分の生活のなかに運動を主体的に取り入れる》ことを考え、体を動かすためにあえて用事をつくる等、定期的に運動する機会をつくっていた。

「雪がなくなったら、防風林まで必ず散歩に行くんですよね。大体1日4000歩、万歩計で計っています。(6)」

「わざわざスーパーに買い物行く。小さい牛乳1つでも、買いに行くんだ。(中略)歩いて。そして、帰ってくれば、8000歩くらい。(1)」

(4) 【意図的に思考を巡らせることによる学びの継続】

《脳の活性化を意識し、作業や他者とのかかわりを意図的に行う》ことで、要支援高齢男性は認知機能が低下しないよう努力をしていた。また、《疑問やわからないことはすぐに調べ、理解する》、《興味・関心をもとに教室や資料等から積極的に学ぶ》というように、学び続ける姿勢を有していた。

「この間も(テレビで)富士五湖って出てたのね。富士五湖ってね、2つくらいしか知らない。やっぱりダメだって調べてさ、5つ覚えるしょ。面白いんですよ。だからなるべく、ボケないようにね。(15)」

「僕、凝りますからね。(子どもたちは)親父はやりだしたらきかないからな、ということでリスペクトは多少あるのかな、と。だから、クラシックに対する僕の造詣は認めてると思う。(2)」

(5) 【自らが快くなれる有意義なひととき】

普段の生活で運動や趣味を行う要支援高齢男性は、《趣味の集まりや教室に参加し自分のしたいことを楽しむ》ようにしていた。加えて、《生活に楽しみや癒しを加え有意義に過ごす》こと考え、すすんで外出し、生活に楽しみや潤いを与えていた。

一方、要支援高齢男性のなかには、自分のためだけに時間を費やすのではなく、《他者のために活動し他者の役に立ちたい》という考えから、町内会活動で役割を担う者もいた。

「今年あたりから、〇〇地区と〇〇地区でクラブをつくっててね、カラオケを(中略)すぐその会館であるんですよ。そこでね、好きなやつを歌うようにしてね。(8)」

「365日24時間働いたから、ある意味解放されたわけですよ。そうすると、その余った時間をどうするかって問題がありますよね。元々本は好きですから、本読む、音楽聴く、パソコンやる。テレビも見る。(2)」

「やっぱり、人の支えになる、人のために尽くすのに生まれてきたっていう精神を小さい時からもっているから。人のために、と思ってますよ。(13)」

Ⅳ 考 察

本研究は要支援高齢男性の社会活動を質的帰納的な方法を用いて調査し、これまで示されていなかった要支援高齢男性の社会活動の現象を明らかにした。本結果は、社会活動が自立した高齢者、要支援高齢女性、要支援高齢男性で異なることを示唆し、これからの生活支援・介護予防の具体的なあり方を検討するための基礎資料になると考える。

1. 要支援高齢男性の社会活動の特徴

要支援高齢男性の社会活動は、家族を含めた他者とのかかわりをもつものと、他者とは直接かかわらず自己完結する活動が存在していた。他者とのかかわりには、深入りしない程度のものから、親しい関係のなかで交流するものまで多様であった。また、社会活動の内容は、気心の知れた人たちとのかかわり、活動内容が明確なサービスやプログラム等の参加・利用、就労時代の名残が続く職場関係者とのつきあい、自身の気持ちや生活を豊かにする活動が含まれていた。

自立した高齢者の社会活動は、家庭外での対人活動⁹⁾、家族や親族を超えた他者との対人活動¹⁰⁾と定義され、社会活動を社会参加・奉仕活動、学習活動、個人活動、仕事の4側面⁹⁾でとらえている。本研究の結果、要支援高齢男性の社会活動は、学習活動や仕事の側面は薄く、社会参加・奉仕活動、個人活動を中心とした活動と考えられる。また、要支援高齢男性は疾患による症状を抱え、なかには手段的日常生活動作に援助を要する者もいた。そのため、社会活動は家族、友人、近所の人等の身近な人たちとの自宅や近隣でのかかわりを主に、体調に合わせて無理のない範囲の活動であると考えられる。要支

援高齢女性の社会活動も、身近な場における他者とのかわり、目的が明確な活動への参加、自宅内での楽しみごとや家事、1人で行う活動を通じた間接的な社会とのつながり¹⁵⁾であったことから、このような活動は性別にかかわらず要支援高齢者全般の社会活動の特徴として考えることができる。

表1に示すとおり、本研究の対象者は退職まで労働を通じ社会のなかで役割を担い活動してきた。多くの者は企業組織の一員として、社会情勢や社会動向の影響を受け、長期間労働してきたと推察される。要支援高齢男性の社会活動に《新聞やニュース、風景を通じた社会動向の積極的な把握》があるのは、これまで社会のなかで働いてきたからこそ、新聞やテレビ、散歩を通じて社会や時代に取り残されないよう活動しているといえる。

また、高齢者の社会活動には性差があり、自立した高齢者の場合、男性は女性に比べ外出や就労、趣味活動が多く、団体・会への参加や友人・知人との交流が少ない¹⁷⁾。要支援高齢者の社会活動においても性差が存在すると考えられる。要支援高齢女性の社会活動として、身近な人たちとの気遣い・心遣いを通じたかわり、集まりへの参加を通じた他者との直接的なかわり²²⁾等が報告されている。先行研究との比較から、要支援高齢男性の社会活動の特徴として以下3点が考えられる。一つめは、職場関係者とのつきあいが含まれることが挙げられる。二つめは、気心の知れた人たちとのかわりがなされ、そのかわりの程度が深入りしないものから、打ち解けたものまでレベルがあることが挙げられる。三つめは、労働を通じ社会のなかで活動してきた経験より、退職した現在も、社会や時代を意識した社会活動が行われていることが挙げられる。

先行研究では、男性高齢者に比べ女性高齢者は近所づきあいや親戚づきあい、知人・友人との交流に熱心で、ソーシャルサポートネットワークが豊かである²³⁾ことが指摘されている。また、女性高齢者は友人を得て何らかの活動を続けられること、男性高齢者は熱意を向けられる活動を見つけられることが生きがい感を得る上で重要である²⁴⁾といわれている。つまり、社会活動における他者とのつきあい方やその考え方には性差が存在するといえる。要支援高齢男性の社会活動には、【かわる相手や活動内容が明確なサービスやプログラム等の参加・利用】があり、加えて《自分の目的に応じた町内会活動への参加》、《自分や家族のために行う家事や家庭内の作業》といった、目的が明確な活動が含まれていた。本結果から、要支援高齢男性の社会活動は場への単なる参加ではなく、自身の目的を明確化、具体

化した活動であると考えられる。

2. 要支援高齢男性の社会活動の目的

要支援高齢男性は安心感や有意義なひとときを得るため、また、身体機能の維持向上や学びの継続、さらには社会とのつながりを得るため社会活動を行っていた。本研究の結果より、要支援高齢男性は社会活動に対する興味、関心、参加意義をもち、自身の目的を明確に有していることが明らかとなった。独居の男性高齢者を対象にした研究では、セルフケアを確立するための強みとして「自律心」、対処として「社会資源の利用」を抽出している¹⁹⁾。この結果が男性特有のものと考えられるならば、要支援高齢男性は自律心から社会活動を一つの社会資源として利用していることも考えられる。

また、要支援高齢男性にとって他者とのコミュニケーションは社会活動のプロセスの一部であり、主たる目的はコミュニケーションを介した社会とのつながりや、安心感の獲得であると考えられる。男性高齢者に関する先行研究では、介護予防事業への男性高齢者の参加割合は低く、茶話やふれあいサロンのような内容への参加が少ない²⁵⁾ことが報告されている。つまり、他者のおしゃべりやふれあいを主たる目的とした活動は、男性高齢者の活動目的になりにくいことが推察される。

加えて、社会活動の意味づけに関する研究において、要支援高齢女性は社会活動を精神的な支え、自己との向き合いとして意味づけていた²⁶⁾ことを報告している。一方、要支援高齢男性の社会活動の目的は、身体機能の維持・向上や学びの継続、有意義なひとときといった積極的な内容であり、自身のメリットが明確なものであった。本研究結果と先行研究を一概に比較できないが、要支援高齢男性は要支援高齢女性に比べ、自己の心身機能や生活において価値あるものを社会活動の目的にしていると考えられる。

要支援高齢男性の社会活動の特徴より、要支援高齢男性の他者とのかわりは、気分転換や気晴らし、安心感、楽しい時間を過ごすといった、自分のために行われる活動であった。そして、プログラム活動を通じて得られる同年代への帰属意識が、安心感という居心地の良さを生んでいるといえる。

3. 要支援高齢男性に対する社会活動支援

要支援高齢男性の社会活動には、他者とかかわりをもつ活動と、他者とは直接かわらず自己完結する活動があった。以下、要支援高齢男性に対する社会活動支援について述べる。

まず、要支援高齢男性は社会活動に対する自身の目的を明確化、具体化しているという特徴を考慮

し、参加意義を実感でき、かつ、自身にプラスとなるプログラムが重要である。また、要支援高齢男性の社会活動の目的には身体機能の維持向上や、学びの継続という自律心が存在していたことから、この自律心を活用することも有効であろう。具体的には、成果や結果がみえる運動プログラム、認知機能向上プログラム、さらに社会情勢や社会動向を感じとれるプログラムが効果的であると考えられる。なお、要支援高齢男性は身体機能が低下していることが考えられるため、プログラムは自己効力感を考慮することと、また、体調によってプログラムを実施できない場合でも、場に参加することに意義を感じとれるプログラムが重要である。

次に、要支援高齢男性の他者とのコミュニケーションは、社会とのつながりや安心感を得るためのプロセスであると考えられることから、他者とのおしゃべりやふれあいを主にした活動は、参加動機にはなりにくい。そのため、他者との交流を図るには、趣味等のプログラムを媒介にするのが効果的である。活動の場面では気心の知れた参加者とかかわれること、また、かかわりが表面的なものから打ち解けたものまで、要支援高齢男性の他者とのかかわりの多様性に対応した配慮が必要である。

最後に、要支援高齢男性の社会活動の目的に、【同年代・年配者と過ごすことで得られる安心感】があることから、各種プログラムを通じた同年代と集える場は重要である。また、社会活動に関連する要因の1つに地域社会への態度²⁷⁾があることから、壮年期の男性が参加意義を見出せる活動を地域に創出し、壮年期から地域への関心を高めていくことで、高齢期の社会活動へとスムーズに移行できると考えられる。

4. 研究の限界と今後の課題

本研究の限界は、対象者の職歴に公務員や自営業の占める割合が多いため、すべての要支援高齢男性の社会活動として示すには限界がある。しかし、2つの異なる地域で対象を選定したこと、また、対象者のデータを地域毎に分け継続比較分析をした後、結果を統合したことから、要支援高齢男性の社会活動として真実性が確保された結果を示すことができたと考える。

今後は、公務員、自営業以外の職歴の対象者に調査を実施し、要支援高齢男性の社会活動を確認していく必要がある。また、社会活動の観点を踏まえた、生活支援・介護予防サービスの実現に向け、要支援高齢男性の社会活動の実態を評価する測定尺度の開発が必要である。

本研究にご協力を賜りました対象者の皆様および、A市ならびにB町の地域包括支援センターの職員の皆様に心から感謝申し上げます。

本研究は、JSPS KAKENHI Grant Number JP 26463548により実施した研究の一部である。

本研究は開示すべきCOI状態はない。

(受付 2016. 2.12)
採用 2016.10.25)

文 献

- 厚生労働省. 地域包括ケアシステム. 2013. http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/ (2016年10月1日アクセス可能).
- 岡戸順一, 星 旦二. 社会的ネットワークが高齢者の生命予後に及ぼす影響. 厚生指標 2002; 49(10): 19-23.
- 安梅勅江, 篠原亮次, 杉澤悠圭, 他. 高齢者の社会関連性と生命予後: 社会関連指標と7年間の死亡率の関係. 日本公衆衛生雑誌 2006; 53(9): 681-687.
- 河野あゆみ, 金川克子. 地域虚弱高齢者の1年間の自立度変化とその関連因子. 日本公衆衛生雑誌 2000; 47(6): 508-516.
- Hong SI, Hasche L, Bowland S. Structural relationships between social activities and longitudinal trajectories of depression among older adults. Gerontologist 2009; 49(1): 1-11.
- Hill RD, Wahlin A, Winblad B, et al. The role of demographic and life style variables in utilizing cognitive support for episodic remembering among very old adults. J Gerontol B Psychol Sci Soc Sci 1995; 50(4): P219-P227.
- Herzog AR, House JS. Productive activities and aging well. Generations 1991; 15(1): 49-54.
- 玉腰暁子, 青木利恵, 大野良之, 他. 高齢者における社会活動の実態. 日本公衆衛生雑誌 1995; 42(10): 888-896.
- 橋本修二, 青木利恵, 玉腰暁子, 他. 高齢者における社会活動状況の指標の開発. 日本公衆衛生雑誌 1997; 44(10): 760-768.
- 岡本秀明. 高齢者の社会活動とそれに対するフェルト・ニーズ (felt needs): 実証的研究の提案. 生活科学研究誌 2005; 4: 281-295.
- 平野美千代. 日本の「高齢者の社会活動」: 概念分析. 日本保健科学学会誌 2011; 14(3): 121-128.
- 曾根稔雅, 中谷直樹, 遠又靖丈, 他. 介護予防サービス利用者における日常生活の過ごし方と要介護認定等の推移との関連. 日本衛生学雑誌 2012; 67(3): 401-407.
- 三好理恵, 浅川典子, 橋本志麻子, 他. 要支援・要介護高齢者の楽しみに関する研究. 埼玉医科大学看護学科紀要 2009; 3(1): 1-8.
- 大河内二郎, 高椋 清, 東憲太郎, 他. 要介護高齢者における余暇および社会交流ステージ分類の開発. 日本老年医学会雑誌 2014; 51(6): 536-546.

- 15) 平野美千代, 佐伯和子, 河原加代子. 要支援にある独居の前期高齢女性の社会活動の特徴. 日本在宅ケア学会誌 2011; 14(2): 66-75.
 - 16) 池森康裕. 老人クラブ参加者の性別・年齢別の社会参加状況と社会活動への意向. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌 2014; 10(1): 15-22.
 - 17) 斎藤 民, 近藤克則, 村田千代栄, 他. 高齢者の外出行動と社会的・余暇的活動における性差と地域差: JAGES プロジェクトから. 日本公衆衛生雑誌 2015; 62(10): 596-608.
 - 18) 澤岡詩野, 渡邊大輔, 中島民恵子, 他. 都市高齢者の近隣との関わり方と支え合いへの意識: 非常時と日常における近隣への意識に着目して. 老年社会科学 2015; 37(3): 306-315.
 - 19) 河野あゆみ, 田高悦子, 岡本双美子, 他. 大都市に住む一人暮らし男性高齢者のセルフケアを確立するための課題: 高層住宅地域と近郊農村地域間の質的分析. 日本公衆衛生雑誌 2009; 56(9): 662-673.
 - 20) グレグ美鈴. 主な質的研究と研究手法. グレグ美鈴, 麻原きよみ, 横山美江, 編. よくわかる質的研究の進め方・まとめ方: 看護研究のエキスパートをめざして. 東京: 医歯薬出版. 2007; 54-56.
 - 21) Holloway I, Wheeler S. ナースのための質的研究入門: 研究方法から論文作成まで (第2版) [Qualitative Research in Nursing (2nd ed)] (野口美和子, 監訳). 東京: 医学書院. 2006; 252-258.
 - 22) 平野美千代. 日本における要支援高齢女性の社会活動の概念分析. 北海道公衆衛生学雑誌 2014; 27(2): 123-130.
 - 23) 西村昌記. 高齢者の一人暮らし 一人暮らし高齢者の生活課題: サポート・ネットワークの観点から. 老年精神医学雑誌 2004; 15(2): 184-191.
 - 24) 近藤 勉, 鎌田次郎. 高齢者の生きがい感に影響する性別と年代からみた要因: 都市の老人福祉センター高齢者を対象として. 老年精神医学雑誌 2004; 15(11): 1281-1290.
 - 25) 大久保豪, 斎藤 民, 李 賢情, 他. 介護予防事業への男性参加に関連する事業要因の予備的検討: 介護予防事業事例の検討から. 日本公衆衛生雑誌 2005; 52(12): 1050-1058.
 - 26) 平野美千代, 佐伯和子, 河原加代子. 要支援認定を受けた高齢女性の社会活動に対する意味づけ: 独居の前期高齢女性に焦点をあてて. 北海道公衆衛生学雑誌 2014; 27(2): 69-74.
 - 27) 岡本秀明. 都市部3地域の高齢者に共通する社会活動への参加に関連する要因: 東京都区東部, 千葉県市川市, 大阪市の調査研究から. 和洋女子大学紀要 2015; 55: 135-147.
-

Social activities of older men who require daily support and the purpose of such activities

Michiyo HIRANO*, Kazuko SAEKI*, Izumi UEDA^{2*}, Hikaru HONDA* and Yoshiko MIZUNO*

Key words : social activities, daily support required, older men, qualitative research

Objectives The purpose of this study was to analyze the social activities of older men who require daily support, and to clarify the purpose of such activities, in order to develop effective living support and preventive long-term care service, suitable for this population.

Methods Individual, semi-structured interviews were conducted with 17 older men. Data were analyzed using inductive and qualitative methods.

Results Four categories of social activities were identified, and four categories of purposes of these social activities were extracted.

The following were the identified social activities: maintenance of “comfortable relationships with others,” including family, relatives, friends, and neighbors; “participation and use of services and programs with clear objectives and relationships with others,” such as long-term care insurance system services, clubs for the elderly, and hobby groups; maintenance of “relationships with former colleagues, depending on their experience of working with them,” where some individuals actively participated in gatherings with former colleagues, while others did not keep in touch at all; and participation in “activities to enrich their feelings and quality of life within their living space,” such as reading, watching TV, and doing household chores.

The purposes of the observed social activities were to build “relationships with society through communication with other people” and to have a “sense of security by spending time with people of the same age and with those older than them.” Hence, participants engaged in clubs for the elderly, as well as in hobby groups. In addition, participants made time for exercising regularly, which maintained their cognitive function and was intended for the “maintenance and activation of their physical functions by continuing to exercise,” and “continuing to learn by thinking.” Furthermore, participants engaged in the exercise or hobby groups that they were interested in, in order to “utilize their time in a meaningful way” that lead to pleasure and enjoyment.

Conclusion The following were the characteristics of the observed social activities: (1) the activities helped participants to maintain relationships with their coworkers, (2) participants had comfortable relationships with others, with these relationships exhibiting different levels (i.e. intimate relationships or casual), and (3) participants actively followed current events. They have clear purpose join and participate in social activities. In addition, it is suggested that this population engage in social activities to enrich physical function and overall quality of life.

* Faculty of Health Sciences, Hokkaido University

^{2*} School of Health Sciences, Sapporo Medical University